

たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校

スイミー

スイミーは、昭和52年から国語の教科書に載っている。原作は、レオ＝レオニ。谷川俊太郎の訳で、『スイミー ちいさなかしこいさかなのおはなし』がもとになっている。

スイミーの話は好きなんだけど、「ぼくが目になろう。」というところがどうも気に入らないと思ってきたが、松本 直さんの解説を読んでわたしがスイミーの主題を間違えていたんだと気づいた。ちいさなさかなはそれぞれは弱いけれども、心をひとつにすれば大きな力になるということが主題だと勝手に解釈していたようだ。

松本氏は、『一人残ったスイミーがじょじょに人生の美しさに気づく。はじめはさみしがっているが人生を詩的なものとしてながめ、生命力と熱意をとりもどし、岩のかげにかくれていた小さなさかなの群れを見つける。自己認識からもたらされる人生の美しさの気づきを描いた絵本である。』としている。原作は、海の中の描写（絵）がずっと多いらしい。『にじいろのゼリーのようなくらげ』『水中ブルドーザーのようないせえび』『うなぎ。顔を見るところには、しっぽをわすれているほど長い。』巧みな海の中の描写、色彩と明暗と動きを読み取り、情景を想像することが一番大切なのもかもしれない。ずいぶん長い間勘違いしてきたものだ。二年生を担当した経験はないから、子どもたちにすまないという思いにはならないことが救いだ。

原作がスイミーの成長を美しく興味深い海中の描写によって表現している絵本だとすると、「ぼくが、目になろう。」というスイミーの言葉は、自分が一匹だけ黒いという個性や、まぐろから一匹だけ逃げることでできた力に気づき、自己認識を深めた言葉、自己の成長を自覚した言葉といえる。

物語文の学習では、叙述に忠実に読み取ることが大切だと言われている。しかし、原作が絵本の場合は、本文とともに挿絵も同等か同等以上に大切になってくるのではないか。叙述だけから「協調、団結、協力」が主題だと考えてきたことがひどく的外れでこっけいなことのように思えてきた。たぬきの糸車のたぬきが糸車に合わせて目をくるくる回す場面や、ごんぎつねのゴンが兵十のかげをふみふみついていく場面など、子どもたちが想像豊かに情景を語れるようもっと工夫すべきなのかもしれない。

それにしても 寺西先生の授業はすばらしかった。指導案を低学年でよく練っていたのだろう。運動会の表現運動を見て、船穂中学校の神嶋先生が、「あの先生はすばらしい。笑顔がいい。」と言われていたが、指導者の笑顔は子どもたちに落ち着きと安心感を与えるとあらためて思った。若い先生の成長と自分の不明さに気づいたスイミーの授業だった。

